

《書評》ヴァレリー著／塚本昌則訳『ドガ ダンス デッサン』

安永, 愛
静岡大学人文社会科学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/6632414>

出版情報 : Stella. 41, pp.169-172, 2022-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de
l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



ヴァレリー著／塚本昌則訳
『ドガ ダンス デッサン』

安 永 愛

2021年9月、岩波文庫に塚本昌則氏の新訳によるヴァレリー『ドガ ダンス デッサン』が加わった。文庫本としては異例ながら、ドガのデッサンの木版画や銅版画をも収めたカラー版としての出版である。木版画や銅版画の選択やその配列も、ヴァレリーと画商アンプロワーズ・ヴォラルの共同制作による初版豪華本の造本を踏まえたものとなっている。

『ドガ ダンス デッサン』のテキストにかんしては、1942年に上梓された吉田健一による翻訳（ただしタイトルは『ドガに就て』）を皮切りに、粟津則雄訳（1963年。タイトルは『ドガ』）、清水徹訳（2006年）、今井勉訳（2012年）が刊行されており、日本でも美術愛好家や文学愛好家に広く読まれている作品のひとつである。だが、ヴァレリーのテキストがドガのデッサンを含む325部限定の豪華本に収められたものであることは広く知られていたものの、実際にデッサンとテキストがどのように配置されているかについての情報は共有されてこなかった。豪華本は発売価格2,500フラン（ミシェル・ジャルティによれば、現在の換算で2,000ユーロ）という破格のもので、日本の公的機関でも所蔵しているところがなかったためでもある。

2006年9月から翌年3月にかけて箱根のポーラ美術館で開催された展覧会「ドガ、ダリ、シャガールのバレエ——美術の身体表現」に、この稀覯本が展示されたが、ガラス越しに見ることしか許されていなかった。ドガ生誕百周年に合わせ、2017年11月から翌年2月にかけてパリのオルセー美術館で開催された展覧会「ドガ ダンス デッサン——ドガへのオマージュ、ヴァレリーと共に」(Degas, Danse, Dessin. Hommage à Degas avec Valéry)に伴って、豪華本が復刻され、手頃な価格（とはいえ邦貨にして3万円弱）で出版されるに至り、同書におけるテキストとイメージがどのように配置されているかがよう

やく広く共有されることになったのである。

複数の既訳がある『ドガ ダンス デッサン』の翻訳に塚本氏が行き組まれたのも、この回顧展によって明らかになった文学と美術に相渡る種々の事実を踏まえてのことである。限定豪華本でしか知られていなかったテキストとイメージの協働のありようを、日本の読者が文庫本の形で享受できるのは、何とも贅沢なことである。フランスでは同書初版の復刻版が出ているとはいえ、手頃なフォリオ版のような形での画文集は出版されていないだけになおさらである。

塚本氏は、既訳との差異化ということを特に意識することなく、新たに判明した事実や最新の研究成果を踏まえ、虚心に翻訳を進めていかれたとのことである（2022年11月12日、東京大学文学部で開催された日本ヴァレリー研究会の本書合評会における同氏の発言による）。訳文には古めかしさや銜学じみたところは微塵もなく、終始、徹底した原文理解からくる心地よい平明さが貫かれている。ヴァレリーの文章自体は平易とはいえないが、晦渋さを纏うことを武器とするタイプの作家ではない。その思考の筋道を丹念に追うならば、少なくとも散文は明晰なものに映る。塚本氏の新訳に臨むさいの拍子抜けするほどの屈託のなさ、ヴァレリーの思考の筋道、その方法感覚というべきものに通暁していることからくる自信によるのであろう。

塚本氏は、文庫本にして200頁強のこの新訳に、行き届いた86の注記を付した。その数と選択が絶妙である。「訳者あとがき」は、74頁という文庫本としては異例の長さに及び、「あとがき」の範疇を超えている。そこで目指されているのは、画文集の成立の背景を隈なく捉えるとともに、本作品を出発点として、ヴァレリーというひとりの詩人・思想家の生涯にわたるいくつかの主要テーマを提示し、彼が物した他作品へと読者を誘うことである。テキストの分量からすると決して「大著」とは言えぬこの画文集には、ヴァレリーの思考と感性のエッセンスが凝縮されているのである。

さて、ここまでヴァレリーのテキスト自体は人口に膾炙したものとの前提のもと、塚本氏による新訳が岩波文庫にラインナップされたことの意義に焦点を当てるかたちで私見を述べてきた。『ドガ ダンス デッサン』は名著中の名著であり、文献学的新見地や研究の最新動向に疎い筆者が贅言を費やすべきではないのかも知れない。しかし塚本氏の訳文に触れて新たな気づきもあったので、本作品の意義について、以下に細やかな所見を記しておきたい。

まず注目すべきは、画文集の出版がドガ死去から 20 年近くを経た 1936 年であり、そこに収められたヴァレリーの断章のうちには、出版に先行して発表されたものがいくつか混じってはいるが、全体としては画家の死去からの時間的隔たりが作品の基調を成しているという点である。「ドガ」で始まり「黄昏と終曲」で終わる 32 の断章は、時系列を離れて、緩やかながらもひとつの統一体を形成している。冒頭の断章「ドガ」で彼の人となり、芸術家としての最も定性的な部分が捉えられ、最後の断章「黄昏と終曲」でドガが「ほとんど消滅した種族」として振り返られる。その照応が哀切である。ヴァレリーの言う「大芸術」（創作のために全身全霊のコミットメントを要求し、それを理解し享受するのにやはり全的なコミットメントを必要とする芸術）が過去のものとなった時代へのアイロニーが語られゆくなかに、ドガの人生折々の姿や、彼が向かい合った芸術的課題についての断章が並んでいるのである。

断章のなかには、ヴァレリーの妻の叔母でドガとも近しかった画家のベルト・モリゾや、ヴァレリー家と同じアパルトマンの別階に住み、ヴァレリーの信も厚かった画商エルネスト・ルアールの言葉の丸ごとの引用もあれば、ドガの固有名から離れて、著者自身が美術や芸術の諸テーマについて考察する断章も含まれている。そのような意味では緊密でも均質でもない断章群は、にもかかわらずドガという人間の生きた時空と、青年ヴァレリーと老画家を包み込んでいた精神の気圏を喚起する。気難しくも、時に滑稽で子供っぽくさえあったドガ、巨匠的なアングルへの敬服の思いと、時代への挑戦者たるドラクロワへの共感との間で引き裂かれていたドガ、芸術の理想に精神を奪われているがゆえに、ぞんざいで素っ気もない日常生活を送っていたドガ、作品の完成に甘んじず、常に可能態としてのデッサンに飽くことなく立ち返っていたドガ……。ヴァレリーのテキストは、あたかも垣間見たドガの可能態としてのスナップ写真のごとし。そしてそこに喚起・招来されるドガは、まさにその人の不在という動かしがたい事実によってメランコリックな色合いを纏うのである。

本書の日本語訳を最初に手掛けたのは吉田健一であるが、彼はその訳書の「跋」に、「此の作品で我々がヴァレリイを殊に親しく感じるの、老境に入った彼の散文の無比な冴えと相俟つて、彼が其処で一人の友達の思ひ出を語つて居るからであるやうに思はれる」と記すとともに、出会った頃のドガと同年輩となったヴァレリーが語っているという事実に「一層の懐かしさ」を感じると

述べていた。このとき吉田健一は28歳だったが、訳業の達成度と共に、その成熟した感懐には驚かされる。ともあれ、長い時間を置いて故人を思い出すこと、そして、それを語る人物も青年から老境へと時間を通過しているという語りの奥行きが『ドガ ダンス デッサン』の魅力の源泉であることに疑いは容れないであろう。

『ドガ ダンス デッサン』は、多様な読みを誘う書物である。美術論として読むのも良いし、芸術論として読むのも良い。もちろんドガ論として読むのも良い。塚本氏は、ヴァレリーが印象主義までの画家にしか言及しないのは、20世紀の芸術が詩人の奉じる「大芸術」の理念にそぐわぬものだったためだと説き、彼が同時代の芸術家たちの抱えていた課題に直面していたことは本書のいくつかの断章のなかにはっきりと見て取れる、「ただし、それを19世紀の芸術家の眼を通して捉え直そうとした」(316頁)のだと続けている。まことに示唆に富む指摘と言うべきであろう。

本書を美術論、芸術論、ドガ論として読むことには尽きせぬ興味がある。しかし評者にとって本書は何よりも、ひとりの人間の精神に向かい合うとはどのようなことなのかを教えてくれる。ドガの精神に向き合うヴァレリーの眼差しの繊細と寛容、その気韻が刻まれた書物であることに何よりも惹かれるのだ。本書はドガという際立った個性を有する人物との出会いあってこそ成立しえた書物であるが、一方でヴァレリーには、付き合うに足る人間なら誰に対しても「その精神に向かい合う」姿勢があったに違いない、そう思わせる書物でもある。断章を通して、世代単位の時間の流れと、その相即としての人生の時間の儚さへの気づきをも与えられる。

本書『ドガ ダンス デッサン』は、自負心からの力みとは一切無縁な、実に洒脱な書物である。故・保苅瑞穂の評言を借りれば「言葉の運びに無駄がなく、それでいて伸びやかな、フランス語のエレガンスそのもの」(東京大学大学院における『ドガ ダンス デッサン』講読授業での発言)である。塚本氏による最新訳をドガのデッサンと共に読む喜びが広く一般にも共有されることを祈りたい。